熊本大学学術リポジトリ

島の觀世音 ： 長詩 ： 文苑

著者	白月
雑誌名	龍南會雑誌
巻	１２２
ページ	５４-５５
発行年	1907-10-31
その他の言語のタイトル	島の観世音 ： 長詩 ： 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/6064

その興醒むと小兎か
落葉の音にふりかへる
忍ぶ姿のをかしさを
透かしても見る萩の花かげ

（完）

島の觀世音

白月

北玄海のたゞ中に
盤石太古成りしまゝ
嚴然遂に動ぎなく
聳えて高き烏帽子島

その頂に安置れたる
觀音佛の立姿
露が月より流し來る
苔、彩どりて御衣

み佛なれば朽ちもせず、
北は千里の大洋や
水、雲、空の七つ色
光りを浴びて立ちたまふ

南より來る春の鳥
秋かへり行く鳥の影
送り迎ふる幾春秋
遂に倦んずるさまもなし

齡無窮の觀世音
妙なる相、荒海に
むかひ立ちたる千歳の
慈眼はつねに耀きて——

離れ小島に花もなく
松こそ響け潮風に
海の高音とまじはりて

他界の調幽かかる

かの南極の地の軸に
三更起る子規
眞一文字に北の端
氷の中に消ゆるとき

天空や無際の聚樂殿
銀燭、星の數知らぬ
一つの星の紅に
光りするとく流れ去る

みずや螢の青淵に
映るが如く飛ぶ如く
慈眼の下に大洋を
靜かに渡る月のさま

汚れし星を洗ふごと

汐吹きあぐる大鯨
美しけれどか弱くて
濤に捲かるゝ流れ星

あるひは見ずや北海に
流れ寄せ來る黑潮の
灘に籠めたる大霧の
さ搖るゝ風を起すとき

威神の力巍々として
み佛あればにこやかに
永久幽明の間より
奇しきすがたを見てはすかあ